

だがしや楽校 de ワクワク大作戦～ゆるく楽しく地域とつながろう～

第9回「先輩だがしや仲間から学ぼう」

日時：平成27年9月12日 土曜日 10時から12時 於：セッション杉並

コース学習支援者： 東北芸術工科大学 松田道雄教授

補助者：学校地域コーディネーター 谷原博子

コースアドバイザー：東京大学大学院 牧野篤教授

松田道雄（学習支援者）先生からの手紙

「すぎなみ大人塾だがしや楽校のみなさま」

10月25日、大人塾でも初めてかと思いますが、老人福祉施設でのだがしや楽校、とても楽しみです。私も参加いたします。小学校でのだがしや楽校から、高齢者施設でのだがしや楽校。小学生は私たち自身にとっては過去になりますが、高齢者施設は私たちにとって未来です。だれでも暗い未来は望みません。未来は明るい希望であるべきです、そうしたいものです。今回的高齢者施設でのだがしや楽校を通して、私たちの未来をどうすれば明るくなるのかも考えるきっかけにできればいかがでしょうか。つまり、みなさんが施設の入居者だったとしたら、どんな暮らし方をしたいかです。私個人の今の考えは、相互作用と相互関係を何らかにでも維持できる入居生活です。通常、日常生活は誰でもお互い相互作用によって成り立っています。それができなくなると、施設に入居して介護が必要になると思われています。まったく、力を出さない人を、〇〇キロの「物体」として一方的に支えるのはまったく大変なことです。介護士の負担はそこなのでしよう。もし、そのとき、ほんのわずかでも何か相手も作用してくれれば、2人の共同作用となります。介護士にとっては少しでもラクになり、「物体」ではなく、「人」と一緒にしているという感覚になります。世話される人にとっても、補助されながらも自分のチカラを少しでも出せることが生きるハリ合いになります。

日常生活のすべてはできないけれども、施設の入居者の方も、何か自分からもちよつとでも働きかけることができ、他者と相互作用、相互関係を作ることができるという自信と喜びを、みなさんのだがしや楽校を通して体験できれば、いつかみなさんも施設の入居者になった場合の未来を考えるきっかけになるのではないかと思います。いかがでしょうか。そのうち、入居者の方が地域にでて「みせ出し」するような高齢者施設もでてくるでしょう。慰問に来る人を座ってみるだけの施設より、私は前者のような施設に入りたいと思います。私は今回の入院で、若い主治医の先生から当初予定より早く退院診断されました。看護師さんたちも親切だったのでつい「もつと入院して安静にしたほうが活りが早いんじゃないですか」と尋ねたら「日常生活はたくさんストレスがあるけれども、それに慣れた方が早く活る事が今は証明されている」と言われました。外部の刺激に対して細胞が活性化して適応するのでしょう。

だがしや楽校は、お互いに「自分みせ」出しを介して、相互関係を生み出す活動です。一方通行になってしまうと、イベント興業になります。相互関係は、すなわち「友達」関係です。ヒトによって濃淡はさまざま

でも(一回しか会わないかもしれない人もいるでしょうが)、だがしや楽校は友だちづくりの場と言うこともできます。おととい市内のラジオ局で番組の収録をしてきました。地元新聞で紹介された山形県内の人たちの活動を、当事者を招いて談義する番組です。私が聞き手役になっています。私の紹介は奇妙なことに、大学所属名ではなく、「駄菓子屋楽校」になっちゃっています。「駄菓子屋楽校」って、どこにあるのかと思われているのかもしれませんが、10年ほど前、別のミニFMで担当した番組も同じです。

だがしや楽校の学びの最大の財産は、お互いの生き方を学びあうことができるということだと思っています。あくまで、その場の「自分みせ」は人と関わるための玄関口(出島)であって、それを出会いの始まりとしていろいろな関わる機会がありながら、ゆるやかにお互いその人から生き方を学ぶ、人生を相互に支え合うといったインターケア(ダブルケアは二重の負担ですが、インターケアはお互いにケア(あう)、インターライブ(お互いに生きる)の関係性がどんどん生まれていくのではないかと思います。「駄菓子屋楽校」は、この社会のいたるところ。「駄菓子屋楽校」の学びは「生き方学邦(まなぶ・がくぶ)」。そんな風に思っています。2002年に出した「駄菓子屋楽校」はその約20年後、団塊世代が70歳代になっていく時期の世界で初めての、本当の日本の少子高齢社会像を思い描きました。そこに、「老若共同参画社会」、リアルとネットの「両生類」などを提起しました。みなさんと一緒に活動しながら、機会あればぜひ未来の生き方談義などしたいものです。



学習支援補助者 谷原

杉並第七小学校での開催に続く、第2弾の「だがしや楽校」は、それぞれの地域の実情を活かした実践につながるトライアルになったらと思います。本日皆様あてのお手紙をいただきましたが、松田先生は、自分が生き活きと生きるためのツールとしてのだがしや楽校とおっしゃっています。今日は、だがしや楽校で学び、地域で生き活きと活躍している先輩たちの姿から学びたいと思います。どんなふうに行ったのか、どう変わったのか。これをお聞きになって、次回の参考にさせていただきたいです。今日は3名の先輩に来ていただきました。

日直(当日の受講者の中で選ばれた人)

老人福祉施設での「だがしや楽校」の開催は、これからの活動につながる取組になるなど予感しています。本日は先輩方の話をお聞きしたいと思います。

学習支援補助者 谷原

現役受講生が先輩にインタビューする形式で行います。

先輩1×聞き手1

Q：だがしや楽校に入る前を教えてください

A：1980年に杉並にやってきました。子育てをずっとしてきたのですが、母の介護もしていて、子どもとおばあちゃんの世話の2つが重なり、忙しくつらかったです。介護が長いと自分自身もまいってしまいます。趣味は手芸で、没頭できるのですが、ずっと家の中でした。保護者会などで、家の外にでることは本当に嬉しく楽しみでした。

Q：入るきっかけを教えてください

A：母が特養に入ったので、テレビで見ていた旅行に行きたいなと思っていたのですが、意外に行きたい気分にはなりません。そんな折、図書館に行ったら、「だがしや楽校」のポスターを見つけました。何か楽しいことがあるんじゃないかと思って、入ってみました。最初は、よくわからなかったです。自分みせてなんだろう？だがしや楽校って？とっていました。だがしや楽校に通うようになってから、寄り道がすごく楽しかったです。駅の周りで買い物したり、受講生の皆さんと話したり。楽校では、何かを作って、人と話して、すごく自分自身が癒されました。解放された感じで、人生のリハビリだと思いました。

Q：だがしや楽校の思い出を聞かせて下さい

A：クリスマスにちなんだ会をしました。だがしや楽校の仲間だけではなく、先輩方も集まってくくださったので、すごくにぎやかでした。ワークショップをしたいと思って出店し、ツリーと雪だるまを作りました。すると、参加してくれた方から、作品をオーストラリアの孫に送ると聞きました。小さな世界にいた私の手芸が、海外に、外に出るのがすごく嬉しかったです。こうして、どんどん人の手に渡り、嬉しさや楽しさの助けになるのだなと思うと、辞められなくなりました。それと、松田先生には大変お世話になっていて、雪の山形を見せたいということで、案は出ていたのですが、行ったのは3年後でした。地元の方のおうちに泊まったり、近所の方と交流したり。温泉に行く予定だったのですが、お店が定休日に入れなかったのも良い思い出です。

Q：生きる豊かさを感じます

A：毎日何らかのことで、ワークショップやだがしや楽校の関係の予定が入っています。自分で忙しくしていると思うのですが、ちょっと欲張って、いろんなことをやりたいと思っています。

Q：10年後の自分についてお聞かせください

A：10年前は籠っていました。昔の自分が、今の自分をみたら驚いているでしょう。スケ

ジュールに追われぬように、計画をたてていきたいです。でも、きっと忙しく過ごしているんでしょうね。

Q：先輩にとって、だがしや楽校とは？

A：私の人生の中心になっています。出かける時には、夕飯がサンドイッチになるので、家族には迷惑かけているかも。でも、一度、楽しさを知ると、なかなか抜け出せません。みなさんも、ぜひハマってみてください。

先輩2×聞き手2

Q：だがしや楽校に入る前を教えてください

A：団塊の世代で、仕事一筋でした。広告代理店という激務で昼夜の無い人生で、その後は財団に勤めました。その後、病気をして入院し、定年まで3年あったのですが、パッとやめて、家に入りました。孫のために折り紙を作りはじめたのが、今の活動の始まりだと思います。それまでは、趣味は陶芸くらいでした。

Q：入るきっかけを教えてください

A：杉並区報なんて見たことなかったのですが、たまたま見つけたのがキッカケです。だがしや楽校という名前、駄菓子屋と楽校。駄菓子屋は懐かしいなと思いつつ、楽しむというのが良いなと思いました。

Q：折り紙の活動について教えてください

A：本だけでは折り紙を学ぶのも限界があったので、また区報で折り紙教室を見つけて、参加してみました。そこで、バラの風車に出会い、魅せられました。折り紙ならば、子どもからお年寄りまで喜んでもらえるかと確信しましたし、回る折り紙なんて初めて見ました。売り物になるほどのクオリティで、しかも「幸せになる」というフレーズも気に入り、バラの折り紙作りに、のめりこみました。

Q：だがしや楽校の思い出を聞かせて下さい

A：自分みせを初めてやったときは、折り紙をとりあえず見せるだけでした。当時は、折り紙としてはまだまだ初心者で、大人と子どもをつなぐというコンセプトをもって、作り方を教えていました。だがしや楽校には、いろんなタイプの人がいるなど発見があり、出会いがありました。商店街で、仲間たちと一緒に出店して、折り紙を外に出しての展示となりました。初めての体験でしたが、楽しかったです。縁日のような感じで、わいわいと活気に満ちていました。最近は、月1で、仲間たちと集まっています。技、生き方、時間の過ごし方はそれぞれあって、だがしや楽校は、生き方の見本市のようです。地域の集会所

で活動していると、地域の方とのつながりが広がりました。



Q：参加してからどんな変化がありましたか

A：多忙になりました。会社時代とは、また違う人たちとの出会いが杉並で生まれました。折り紙も陶芸も複数の先生の下で習っています。そうすると、出会いもあり、それぞれの良いところを取り入れられます。好奇心旺盛で新しいことをやりたいという性分です。今では、地域区民センターの運営にも関わって、企画もやってみています。講座をするだけでなく、今度は企画側にまわっていく。そんなステップがあるようです。

Q：10年後の自分についてお聞かせください

A：基本的には折り紙をやりたいです。折り紙のバリエーションを増やし、レベルアップもしたいです。折り紙で価値を作りたいと考えています。子ども用にあげるものと、大人用に指輪をつくって販売したいと模索していて、チョーカーやヘアバンド、ペンダント、ピアスなど、女性のファッションにあわせた折り紙を増やしたいと思っています。外国の方が増えてきているので、おみやげとして渡しています。持ち運びできるように、バラの折り紙をプラスチック製のボールに入れて、解説パンフレットもつけて、1000個くらい配っています。

Q：先輩にとって、だがしや楽校とは？

松田先生、谷原さんの人柄に魅せられて3年たちました。人との出会いのたまたま箱。誰とどんな出会いがあるかわからない、出会うといろんな発見があります。自分では特技がないとおっしゃる方も、実は後方支援が上手だったり。どんな方でも、だがしやに関われる

と思います。企画や展示では、やってみることと、自分も楽しむ。すると、いろんなひとに楽しんでもらえます。松田先生がおっしゃる、廃棄物をつかって、うまく生かし、価値をつける。クリエイティブエコという考えにも共感しました。松田先生のお話をきき、実際にやってみると、人の輪や考え、楽しさも広げていけるんだなと実感しました。

先輩3×聞き手3

Q：だがしや楽校に入る前を教えてください

A：勤めを全部辞めて、介護に入りました。母はボランティアをたくさんやっていた方なので、私も参加してみました。委員をやってみたり、歩くことを目的とした自主グループをつくって、東京都内に出かける企画をしています。神田川に花を植える活動も20年近くやっております。介護をずっとやってきたのですが、介護に関わる人に興味があり、当時は出来たばかりのデイサービス事業にも携わりました。施設長として、講座をしたり、話したりと12年ほどやっていて、今こういう経験が、全部生きています。辞めたあとに、ポツと穴が空いたときに、区報を見て、社会貢献のある生き方と書いてあったので、大人塾に参加しました。自分みせってなにをするのかなと思いつつも、自分ができる手工芸をたくさんやりました。押し花もずっとやってきたので、ワークショップもしてみました。大人がたくさん集まっているのも驚くのですが、何かできる人が集まっているのがすごいです。主婦をやりながら、他のこともやっているとという暖かい人たちでした。せっかくこんなすごい人が集まって、出会いがあったのだから、これだけで終わるのはもったいないので、NPO法人も作りました。大人塾出身者の人が、地域の人が、自分たちでできることを応援するNPO法人です。

Q：NPOをつくった原動力はどこからくるの？

A：せっかくこれだけの人が集まって、会が終わったら、解散してしまうのが惜しいと思ったのです。会った人から離れたくなくて、1年でさよならというのは寂しいなと思います。自分たち、地域、杉並区のために、何かできたらと思って、ずっと続けていきたいと思っています。

Q：継続性のコツ

A：デイサービスをやっていたときに、会報をつくり、地域の人に知らせてきました。参加者の方にも、こんなことやっているよと知らせています。会報を出し続けると、お互いの連絡になりますし、こういうことやっているよと知らせられます。こうやって会報を出すのが、長続きのコツかなと思います。知った顔だけで集まるのも楽しいのですが、できたら、いろんな人が参加できるようにしたいです。今、参加している人が楽しくて、次の人を呼んでくる。そんな会にしたいのです。



Q：先輩にとって、だがしや楽校とは？

A：小さなコミュニティカフェもやっています。活動は、続けるということが大事。自分ができなくても、誰かにお願いねと頼んだり、次の人が参加できるようにしています。10年後も、いろんな人が関わり、集まり、楽しく参加できるような場にしたいです。

参加者からの質問

Q：コミュニティカフェは、誰でも行けるのですか？

A：健康麻雀をやっているので、高齢者、男性が集まっています。麻雀だけではなく、トランプも始めました。楽しさがないと、人は集まりません。楽しいことやっているよと伝えるのも、大事です。

Q：好ましくない人が来るときには、どう対処していますか？

A：そういう時もあります。でも、除け者にするのではなく、どんどん話しかける。いつも来るということは、どこかの部分で楽しさを感じているので、放っておかないでおきます。無口なだけかもしれませんし、ずっと声をかけていると、見てくれていると思って、続けて参加してくれます。一方で、辞めた人を追いかけません。来る人は受け入れ、辞める人は追っていかない。高齢者には、3つのサークルに入りなさいと言っています。行くところがある、しゃべるところがあると思うと、認知症にならないそうです。

日直

愛がいっぱい溢れているなと感じました。いろんなスキルをお持ちのなかに、愛情がつまっている。人に恋をするような感覚を覚えました。

学習支援補助者 谷原

先輩の皆様、ありがとうございました。お聞きしたことを参考にしながら、11月以降の企画を進めたいと思っています。だがしや楽校の向こうに何があるのかなと考えながら、自分のテーマを見つけて、活動のキッカケになればと思います。

